

2020. 7. 19 (日) マタイ21:18~22

21:18 さて、朝早く都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。

21:19 道端に一本のいちじくの木が見えたので、そこに行ってみると、葉があるだけで、ほかには何もなかった。それでイエスはその木に「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。

21:20 弟子たちはこれを見て驚き、「どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか」と言った。

21:21 イエスは答えられた。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、そのとおりになります。

21:22 あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることになります。」

<説教>

イエスは、前日にはエルサレムの神殿でユダヤ人の祭司長たちや律法学者たちを怒らせ、また文句を言ってきた彼らを黙らせました。

しかし“宮清め”(21:12-13)によっても、また聖書を「あなたがたは読んだことがないのですか」とイエスから諭され教えられても、彼らは自分たちの不信仰の罪を認めようとせず、悔い改めようとしませんでした。

むしろ反対に、ますます彼らはイエスを自分たちへの脅威(脅かす者)と見なし、憎むことになりました。

このときも「祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。群衆がみなその教えに驚嘆していたため、彼らはイエスを恐れていたのである。」(マルコ 11:18)とあります。

しかしイエスは翌朝再び彼らがいるエルサレムの街に入って(帰って)行かれます。

祭司長たちや律法学者たちの企てどおりに、彼らから多くの苦しみを受け、ローマ総督ピラトに訴えられ、十字架で殺されるためでした。

エルサレムへの、また神殿への、ユダヤ人たちへの審判をイエスは宣告ないましたが、それを執行するときではまだありませんでした。

その前に、イエスが十字架で殺され、つまり死刑を執行され、そして三日目によみがえらなければなりません。

それは私たち、イエスの弟子として召された者たちのためでありました。

イエスは一本のいちじくの木を教材として弟子たちにお教えになりました。

21:18 さて、朝早く都に帰る途中、イエスは空腹を覚えられた。

21:19 道端に一本のいちじくの木が見えたので、そこに行ってみると、葉があるだけで、ほかには何もなかった。それでイエスはその木に「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。

いちじくの木に対するイエスのみことばをペテロは「のろい」と理解しました(マルコ

11:21)。

しかしそれはのろいというより、やはり神の審判の宣告でした。

神が審判なさるのは、直接には祭司長たちや律法学者たちに代表されるところのユダヤ人の宗教、神殿礼拝でした。

多くの動物のささげ物や献金、立派な祈りなど、形式や言葉では敬虔で信仰深いように装っていても、そこには実（じつ）—中味—がありませんでした。

つまり、神がお求めになっている信仰、悔い改め、信仰の祈り、正義、あわれみ、誠実などの実（み）がありませんでした。

そんなユダヤ人の宗教、神殿礼拝の姿を象徴的に表したのがこの「一本のいちじくの木」でした。

そこには「葉」だけは立派に茂るだけ茂っていたけど「葉があるだけで、ほかには何もなかった」のです。

そこにはイエスがお求めになった実がありませんでした。

なお、「いちじく」は「ぶどう」と並んで神の民イスラエルを表すものでした（エレミヤ 8:13、ホセア 9:10)

神が預言者たちを通して予めお告げになっており、その神のみことばのとおりこの地上に来られ、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言って始めておよそ三年間イエスが福音を宣べ伝えて来たのに、イエスのみことばとみわざを見聞きして来たのに、祭司長たちや律法学者たちに代表されるところのユダヤ人たちはイエスを信じませんでした。

イエスを生ける神の子キリストと認めて、信じて、悔い改め、信仰によって祈り、「公正を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩む」（ミカ 6:8）という神がお求めになって来た実を結んでいませんでした。

ルカ 13:6-9 には三年間実を結ばない（悔い改めない）無駄ないちじくの木のとえをイエスご自身も語っていたことが書かれています。

そんなユダヤ人とその宗教、神殿礼拝の本当の姿を、また彼らに対する神の来たるべき審判を、イエスは、先に神殿の商売人たちをみな追い出し、両替人の台を倒し、商売人たちの腰掛けを倒されたのと同じ厳しさで、「のろい」とも取れるほどの厳しい言葉で宣告なさったのです。

さてしかし、ひとたびイエスに召され、イエスを信じ、イエスにつき従うように召されたイエスの弟子たちは不信仰に逆戻りしてはなりません。

イエスのみことばとみわざを真剣に、畏れをもって見、また聞かなければなりません。

自分自身の不信仰と闘わなければなりません。

私たちにひとり子イエス・キリストを与えてくださり、イエス・キリストを信じる信仰を与えてくださり、悔い改め、公正を行い、誠実を愛し、へりくだって神とともに歩む信仰の歩みをさせてくださる神に、「成長させてくださる神」（I コリント 3:7）に、「御霊の実」（ガラテヤ 5:22-23）を結ばせてくださる神に全く信頼しなければなりません。

そういう面で、イエスの弟子たちはなお弱かったのです。

21:20 弟子たちはこれを見て驚き、「どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか

か」と言った。

先には祭司長たちや律法学者たちが宮の中でイエスのなさったいろいろな驚くべきことを見たと言われています(21:15)。

それでも彼らはイエスの神としての力や権威を認めようとはしませんでした。

ここではイエスがいちじくの木になさったことを見た弟子たちが「驚き」ました。

そして「どうして、すぐにいちじくの木が枯れた」のか理解できませんでした。

葉だけで実のない「いちじくの木」が墮落したユダヤ人の宗教と神殿礼拝を表しており、それに対する神の審判を宣告していることがすぐには解らなかつた(ペテロのように単なる「のろい」としか理解できなかつた)のならば、イエスのみことばを悟るのに鈍かつたと言えるでしょう。

それと同時に、弟子たちもまたイエスの力、神の力をなお小さく見積もつていたということが言えるでしょう。

「いちじくの木が枯れた」のは、自然の力で枯れたのではなく、イエスのみことばによって、神の力によって枯れたのです。

弟子たちが「見て驚き」「『どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか』」と言つたのは、彼らが本当にイエスがお語りになつたとおりにまさかなるとは信じていなかつたからだとと言えるでしょう。

または『何もイエスさまそこまですなくともいいと私は思います』と、イエスのなさり方、神がその力を現され、御意思(みこころ)を行われることに対するある種の不満とも言いましょうか、そういうものがあつたのかもしれませんが。

それらはいずれにしても、つまりは神に対する全き信頼の無さ、弱さ、疑い、そしてついに不信仰です。

それでイエスは彼らを助け救うべく、ご自身の、神のみこころと約束をお語りになりました。

21:21 イエスは答えられた。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起つたことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がつて、海に入れ』と言えば、そのとおりになります。

21:22 あなたがたは、信じて祈り求めるものは何でも受けることとなります。」

マルコの福音書では冒頭で「神を信じなさい。」と言われたと記されています(マルコ 11:22)。

今や地上に来られ、これから私たちのために十字架で死なれ、三日目によみがえられるイエス・キリストを信じ、イエスによって神を知り、神を信じるのが(世の中に「神信仰」なるものが数え切れないほどある中で)、真の神が求めておられる真の神信仰です。

エルサレムの宮にはそういう真の信仰も祈りもなかつた故にイエスは商売人たちを宮から追い出したのでした。

神を「信じて祈り求める」、信仰と祈り、信仰による祈りをイエスは弟子たち(私たち)にお求めになりました。

それは私たちが自分の欲望を祈りの形で神に押し付けて、神に命令すれば神は何でもかなえてくれるということではもちろんありません。

「いちじくの木に起こったことを起こ」したり、『山を動かす』ような奇蹟が私たちの祈りの力で、信仰の強さでできるということでもありません。

神がご自身の力で、ご自分の御意思、みこころを成し遂げられるのです。

イエス・キリストを信じ、神を信じる私たちとともにおられる神が、私たちには不可能だ、あり得ないと思われることを「みこころならば」「みこころのとおり」に成し遂げられるのです。

イエス・キリストこそが「わたしが望むようではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」(マタイ 26:39)、「あなたのみこころがなりますように」(26:42)と神を「**信じて祈り求め**」、神のみこころに完全に従い通されました。

そうやってイエスが私たちのために十字架で死なれ、三日目によみがえられました。

このイエス・キリストを信じること、つまり神を信じ神に頼り、神のみこころを私たちの身に実現していただくことが大事です。

私たちの内にある古い人をキリストとともに十字架で死なせ、キリストとともに新しい人によみがえらせることが私たちに対する神のみこころです。

私たちに聖霊を、「**信じて祈り求め**」させ、聖霊を「**受け**」させ、私たちを「神から受けた聖霊の宮」(I コリント 6:19) なさるのが私たちに対する神のみこころです。

事実、すでにそのみこころが行われ、実現しているではありませんか。

『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある(21:13)との神のみこころは私たちの身に、そして教会において実現しているのです。

それはもちろん、神のように完璧に何の欠点もなく私たちによって行われているわけではありません。

私たちはこの地上にある限りはどこまでも弱く、貧しく、未熟な者なのです。

しかし、イエスが先に宮の中に目の見えない人たちや足の不自由な人たちを招き入れ、受け入れ、癒やしてくださったように、また子どもたちの口に賛美の言葉を授け受け入れてくださったように、イエスは私たちをみもとに招き受け入れてくださいました。

イエス・キリストにあって私たちが「**信じて祈る**」神だけが私たち罪人を、弱く未熟な者を神のもの(聖なる者)にしてくださり、新しく造り変えてくださり、豊かな(聖霊の)実を結ばせてくださるり、救いを完成させてくださるのです。